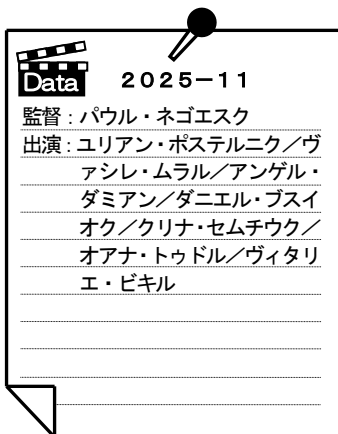




みどころ

ルーマニア映画の日本公開は、『4ヶ月、3週と2日』（07年）しか記憶にない。そんな中、ルーマニアのアカデミー賞たる GOPO 賞 2023 で主要6冠を受賞した“辺境サスペンス”が日本上陸！「この村で飢える者はいない」にもかかわらず、チラシに躍る「人は等しく、愚か。」「見つかった惨殺死体から炙り出される村の〈闇〉とは一。」等の文字は一体何を意味するの？

主人公は中年の警察官。彼の願いは果樹園を営みながらひっそりと第2の人生を送ることだが、ある日、惨殺死体が発見されると……。推理モノではない本作では、犯人はすぐに明かされるが、その意外性にビックリ！

日本では政官財の癒着構造と自民党の単一支配が問題にされてきたが、本作に見る村長と司祭による村の支配構造とは？その中にどっぷりと浸り、「腐敗の沼に、沈んでゆく」選択もありだが、本作の主人公の最後の決断は？

■ルーマニアのアカデミー賞6冠の超話題作が日本上陸！■

毎年1月中旬はアメリカのアカデミー賞のノミネート発表時期だが、ロサンゼルス山火事で関係者の多くに被害が出ていることを受けてその発表が遅れている。他方、ルーマニアのアカデミー賞が GOPO 賞だ。しかして、ルーマニア生まれの新生パウル・ネゴエスク監督が、長編第2作目の本作で、2023年 GOPO 賞の「作品賞」、「監督賞」、「主演男優賞」等の主要部門6冠を達成。ルーマニア映画が日本で公開されるのは珍しいが、私がルーマニア映画として強く印象に残っているのは、『4ヶ月、3週と2日』（07年）（『シネマ18』334頁）だ。2008年のカンヌ国際映画祭で最高賞を獲得した同作は、1980年代のチャウシェスク独裁政権末期における人工妊娠中絶問題を描いた大問題作だった。

それに対して、本作のチラシには「ルーマニア・アカデミー賞6冠の辺境サスペンスが

日本上陸！」と書かれている。映画評論家である私は、サスペンス映画にさまざまなジャンルがあることをよく知っているが、“辺境サスペンス”とは一体ナニ？チラシには、上記の他、「腐敗の沼に、沈んでゆくー」、「この村で飢える者はいない」、「まるでタランティアーノ×リュウベン・オストルンド 今年最高のラストシーン！」、「平和なはずの村で見つかったのは、斧で頭を割られた惨殺死体。それは見過ごしてきた腐敗への警鐘かー」等の文字が躍っている。これを総合すると“辺境”とは、ルーマニアのモルドヴァ地方にある平和なはずの静かな村のことらしい。なるほど、なるほど。

他方、『おんどりの鳴く前に』という何とも思わせぶりな邦題(?)は、一体何を意味しているの？本作のルーマニア語の原題「OAMENI DE TREABĂ (英題: Men Of Deeds)」は、「善良な人々」と「こちら側の人々」のダブルミーニングだそうだが、邦題ではなぜ「おんどりの鳴く前に」になったの？その他、本作についての事前情報は極めて少ないが、ルーマニアのアカデミー賞で6冠を受賞した超話題作たる本作は、こりゃ必見！

■舞台は？主人公は？住人は？村の支配構造は？■

本作の舞台は、ルーマニアのモルドヴァ地方。主人公は、中年の警察官イリエ（ユリアン・ポステルニク）だ。本作冒頭、イリエとイリエの元妻のモナ（オアナ・トゥドル）による、共有のアパートの売却をめぐる口論が描かれる。イリエが果樹園を購入する資金のためアパートを売る必要があると訴えるものの、モナは「今は売り時ではない」と反対。そこにイリエの兄コルネル（ヴィタリエ・ビキル）が入り、「まあまあ」となだめることで結論は持ち越しになったが、この“揉めゴト”は尾を引きそうだ。

他方、この村の政治は、コンスタンティン村のコスティカ村長（ヴァシレ・ムラル）が一手に握り、それをヨルダン司祭のエディ（ダニエル・ブスイオク）が全面的に支えることによって成り立っていることが、パウル・ネゴエスク監督による導入部の描写で印象強く描かれていく。村人たちが村長と司祭を心から尊敬し、慕っているのは間違いなさそうだが、それは一体なぜ？去る1/7に観た『室町無頼』（23年）では、15世紀に起きた応仁の乱前夜の、京の都における飢饉と疫病で苦しむ庶民の姿が描かれていたが、本作の小さな村は豊かで、人々の生活は安定しているため、「この村で飢える者はいない」らしい。そのため、住民は皆、村長と司祭を尊敬し、彼らの言うがままに従っているわけだが、それは一体なぜ？国を豊かにするには、交易が大事！平清盛も織田信長もそんな風に考えたそうだが、ひょっとしてコスティカ村長もそんな考えで、“おらが村”を豊かにしてきたの？しかして、その方法は如何に？それは一体なぜ？

村長と司祭を心から尊敬しているのはイリエも同じ。もともと、イリエは警察官だから村長に雇われているのではなく、国家がその赴任地を決めている国家公務員だ。ところが、今やイリエの目が、一方的に中央より村長に向いていることは明らかだ。本作を演出したパウル・ネゴエスク監督の問題意識を理解するためには、導入部におけるそんな村の支配構造を把握することが不可欠だ。

■□■豊かで静かな村に、ある日殺人事件が勃発！■□■

そんな静かな村に警察沙汰となる事件など起きるはずもないから、イリエは気楽なもの。今般、新たに新人のヴァリ（アンゲル・ダミアン）が着任してきたが、特にやってもらふ仕事もないイリエは「研修期間中は昼寝でもしておけ」的な対応をしていたから、アレレ、アレレ。当然、ヴァリにはそれが不満だ。本当に何も事件が起こらなければそれでもいいのだが、ある日、平和なはずの村で惨殺死体が見つかったからさあ大変！

日本ではかつて『八つ墓村』（77 年）が大ヒットしたが、同作では、八つ墓村で起きた殺人事件を解決するために、探偵・金田一耕助が駆けつけ、名推理の末に犯人を検挙するとともに、八つ墓村の秘密が暴露されるストーリーが秀逸だった。それに対して、本作では、発見された惨殺死体はある村人のものだが、残された妻のクリ스티ナ（クリナ・セムチウク）がすごい美人だというのがミソ。そのためか（？）村長も司祭もクリスティナが精神的にも経済的にも落ち込まず、何とか立ち直れるように最善の手を尽くしていたようだ。そう思う反面、その展開にはどこか胡散臭さが……。それは一体なぜ？

■□■村長と司祭がイリエ宅を訪問！殺人犯は意外にも！■□■

『八つ墓村』は推理小説だから、探偵・金田一耕助による名推理の展開が見どころだった。しかし、本作は推理映画ではないから、美人妻クリスティナの夫の惨殺死体が発見された事件の真犯人はすぐに明らかにされるので、それに注目！それをここで紹介した上で、本作の面白さを書いていく評論のやり方もあるが、本作ではそれは避けたい。なぜなら、本作のストーリー紹介は、次の通りとされており、内容については全く触れていないからだ。

ルーマニア・モルドヴァ地方の静かな村の中年警察官イリエ。野心を失い鬱屈とした日々を送っている彼の願いは、果樹園を営みながら、ひっそりと第2の人生を送ること。しかし平和なはずの村で惨殺死体が見つかったことをきっかけに、イリエは美しい村の闇を次々と目の当たりにすることになる。正義感を手放した警察官がたどり着く、衝撃の結末とは一。

つまり、そんな本件では、事前のネタバレは“厳禁”ということだ。

もともと、静かな村で殺人事件が起きた以上、警察官のイリエが動かなければならないのは当然。そこで成果を上げれば、イリエも中央から認められるかも。イリエがそう考えたかどうかは知らないが、ある夜、村長と司祭の訪問を受け、イリエが2人から聞かされた意外な話とは……？

■□■警察官の任務は？邦題の意味は？それをどう読み解く？■□■

警察官の仕事は、犯罪が発生した場合の捜査と犯人の検挙。イリエも警察官のはしぐれだから、それはわかっていたが、「昼寝でもしておけ」と命じたはずの研修中のヴァリが一人で張り切って事情聴取のために飛び回っていることを知ると、ヴァリを呼んでそれを怒

鳴りつけ、「一切動くな！」と命じたから、アレレ、アレレ……。警察官のくせにイリエは殺人事件の捜査を放棄したの？ そんなバカな！ しかし、もしそうだとしたら、それは一体なぜ？ それはひょっとしてあの夜、村長と司祭の訪問を受けたことがその原因なの？ 本作チラシには、「人間は等しく、愚か」、「腐敗の沼に、沈んでゆく」の文字が躍っていたから、ひょっとして……。

さらに大いに気になるのは、本作の邦題「おんどりの鳴く前に」だ。おんどりは、日本人には馴染みのない動物（鳥）。新約聖書の「マタイによる福音書」26 章で、イエス・キリストが使徒のペトロに対して「あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう」と予言する物語は有名だが、「おんどり」と聞いてすぐにそれを想定するのは、キリスト教徒だけ？ かどうかは知らないが、なぜ本作はそんな邦題とされたの？

本作のパンフレットには、

- ① COLUMN 中島崇文（学習院女子大学 国際文化交流学部 教授）「ヨーロッパ東部における農村で排除される『真面目に働く人々』」
- ② COLUMN 町山智浩（映画評論家・コラムニスト）「おんどりが鳴いた後でも、罪は贖える」

があるので、それをじっくり読み解きたい。

■□■ ヴァリの死亡と果樹園の取得は腐敗構造の表と裏！ ■□■

本作中盤ではあっと驚く 3 つのストーリーが描かれるので、それに注目！ その第 1 は、元妻モナと別れた後、一人でひっそり暮らしていたイリエが、夫を殺害されて一人残された美人妻クリスティナに対して密かに恋心を抱いていたらしいこと。それがハッキリわかるのは、ある日、イリエが高額なネックレスを購入し、それをクリスティナに手渡すシーケンスが登場するためだが、それってかなり歪んだ精神構造なのでは？ 第 2 に、あっと驚くのは、本作ではほんの端役で、イリエの引き立て役に過ぎないと思っていた新米警察官のヴァリが、ある日惨殺死体として発見されたこと。そして、それをイリエに知らせに来た村長も司祭は、もちろん、自分たちはその死亡に関与していないと弁明したが……。

3 つ目は、第 1 の惨殺死体の発見後、何かと苦勞を背負い込んでいるイリエに対して、村長と司祭がその慰勞を兼ねて（？）、事実上村長が握っている果樹園の権利をイリエに対してプレゼントしたことだ。村長からのそんな好意（？）にイリエが驚いたのは当然だが、イリエはそれをスナリ受け取るの？ 下手すると、それは贈収賄の疑いがあると考えべきなのでは？ イリエの警察官としての感覚が、長年の平和な村での生活のために鈍っているとはいえ、さすがにそのヤバさに気づくべきでは？ 私はそう思ったが、チラシに躍っていた文字のとおり、イリエはどこまでも「腐敗の沼に、沈んでゆく」の……？

ルーマニアのモルドヴァ地方の辺境にある静かな村で、ある日、村民の残殺死体が発見されたのは実に意外な出来事だが、それから間もなくして起きた新人警察官ヴァリの残殺死体の発見は間違いなく何らかの人為的、作為的なものだ。だって、ヴァリはイリエの制

止にもかかわらず、警察官らしく（？）最初に起きた殺人事件の捜査を続けている最中に死亡した（殺されてしまった）のだから。すると、合理的に考えれば、ヴァリ殺しの犯人は、最初の殺人事件の犯人と同一！？そんな風に推理を重ねていくと、イリエが村長からタダで果樹園を譲り受けるという恩恵を受けることとヴァリの死亡は、この村の腐敗構造の表と裏！？誰が、どう考えても、そんな結論に行き着いてしまうはずだが・・・。

■□■イリエの決断は？壮絶なクライマックスに注目！■□■

前述した本作の COLUMN「ヨーロッパ東部における農村で排除される『真面目に働く人々』」では、ルーマニアの2人の作家の小説が紹介され、タイトル通り、そこで真面目に働く人々について記述されている。しかし、その結論は、『おんどりの鳴く前に』は極めてルーマニア的な映画である。但し、ここに再現されているルーマニアは、18世紀のファナリオット時代（ギリシアの新興貴族層がモルドヴァ公国を我が物顔に支配し、汚職が蔓延していたオスマン帝国期）と同じ状況に留まり、文明化を拒否する、現地の人々が恥じ入るようなルーマニアなのである。」と書かれている。つまり、ルーマニアで GOPO 賞 6 冠を受賞した本作は、「現地の人々が恥じ入るようなルーマニア」を描いていると書かれているわけだ。

その実態は、本作における村長と司祭による村の支配構造を見ればよくわかる。すなわち、村長と司祭が結託して、タバコの密売その他のありとあらゆる“悪徳ビジネス”に手を染めて、莫大な利益を獲得した上、その分け前の一部を村民に施して、それを善政と偽っている姿は、気分が悪くなるほど酷いものだ。もちろんイリエはその恩恵に乗った上で、警察官としての安定した地位を保障されていたわけだが、この2つの惨殺事件発生後、ハッキリとそれらをもみ消す代償として、村長から果樹園の権利を譲り受けたことに気づいたイリエの最後の決断は？そこでの問題は、チラシに書かれているようにイリエは「腐敗の沼に、沈んでゆく」のか否かだが、COPO 賞 6 冠の“辺境サスペンス”のクライマックスは、意外にもド派手な銃撃戦になるので、それに注目！また、同コラムでは『おんどりの鳴く前に』においても「斧」（古くは「ハルタグ」、映画では「バルディツァ（あごひげ）」と呼ばれている）のモチーフが示される。」と書かれているが、その実態はあなた自身の目でしっかりと！

2025（令和7）年2月4日記